

慧皎高僧傳 に見える特異な語法について

高田時雄

梁の慧皎が撰述した『高僧傳』十四卷¹は、漢の明帝永平十年（六七）佛教が東傳して以來四百五十三年間に活動した二百五十七人の僧侶の事跡を書き記した書物で、後の道宣『續高僧傳』、贊寧『宋高僧傳』など歴代「高僧傳」の先河を爲したものとして古來重んぜられてきた。著者の慧皎は、氏族（姓）は明かではないが、會稽上虞（今日の浙江省上虞）の人で、會稽の嘉祥寺に住し²、晩年、梁末の承聖二年（五五三）癸酉の年に侯景の亂を避けて潞城（今日の江西省九江）に移り住み、翌甲戌年二月に同地で五十八年の生涯を終えた、と伝える³。要するに、江南土着の人士であり、一生のほとんどを會稽で過ごしたものと考えてよい。

ところで慧皎『高僧傳』を読み進めると、時に特異な語法にぶつかる場合がある。その一例が「達自」で、以下の五條を見だし得る。

（一）曇摩流支、此云法樂、西域人也。棄家入道、偏以律藏馳名。以弘始七年秋、達自關中。（卷二）（曇摩流支は中國語で法樂といい、西域の人である。家を棄てて佛道に入り、もっぱら律藏に詳しいことで名を馳せた。弘始七年の秋に關中に至った。）⁴

¹卷十四序録に「始于漢明帝永平十年、終于天監十八年」というのに従い、撰述の年をふつう天監十八年（五一九）と見なしているが、これを十年ほど繰り下げようとする説もある。牧田諦亮「高僧傳の成立（上）」、『東方學報』（京都）第四十四冊、p.103。

²梁の元帝蕭繹の著した『金樓子』「聚書篇」に「就會稽宏普惠皎道人搜聚」とあり、この惠皎がすなわち慧皎とすれば、また宏普寺に居たことにもなる。

³道宣『續高僧傳』卷六の慧皎傳には「のち終わるところを知らず」とするが、『高僧傳』卷十四序録の末尾に加えられた付記に、この晩年の潞城避難のことを載せる。ただし牧田上掲論文では、侯景はすでに承聖元年（五五二）四月に敗死しているので、この避難は太寶二年（五五一）十二月張彪起義の際の戦亂を避けたものとする（pp.104-5）検討すべき一説として挙げる。

⁴常盤大定譯（『國譯一切經』「史傳部七」、昭和十一年、大東出版社；『高僧傳』の全文を（訓讀も含め）和譯したものとして現在まで唯一のもの）は「關中より達す」とするが

(二) 卑摩羅叉、此云無垢眼、罽賓人。... 頃之聞什在長安大弘經藏、又欲使毘尼勝品復洽東國、於是... 以僞秦弘始八年達自關中。(卷二)(卑摩羅叉は中國語で無垢眼といい、罽賓の人である。... 羅什が長安で大いに經藏を廣めているのを聞き、優れたピナヤ(律藏)を中國にも普及させたいと思い、そこで... 僞秦の弘始八年に關中に至った。)⁵

(三) 釋智嚴、西涼州人。... 時有佛馱跋陀羅比丘、亦是彼國禪匠。嚴乃要請東歸欲傳法中土。跋陀嘉其懇至、遂共東行。於是踰沙越險達自關中。(卷三)(釋智嚴は西涼州の人である。... そのころ佛馱跋陀羅比丘も、彼の國(罽賓)の禪の高僧として名があった。智嚴が彼に東のかた中國に行つて法を傳えてもらえないかと懇請したところ、佛馱跋陀羅はその情熱に動かされて、一緒に東に向かうことになった。かくして沙漠を渡り険しい山を越えて關中に到達した。)⁶

(四) 釋曇鑿、姓趙、冀州人。... 聞什公在關、杖策從學。... 後遊方宣化、達自荊州止江陵辛寺。(卷七)(釋曇鑿は俗姓を趙といい、冀州の人である。羅什が關中にいるのを聞いて、杖をついて教えを乞いにやって來た。... その後、説教のために旅に出て、荊州にやって來て江陵の辛寺に落ち着いた。)⁷

(p.36) 明らかな誤り。そもそも『高僧傳』の「曇摩流支傳」は『出三藏記集』卷三「薩婆多部十誦律」の條に見える曇摩流支の略傳に取材していると思われる。その箇所についてところは大約以下の如くである。さきに罽賓沙門弗若多羅が長安に來たり、羅什とともに十誦律の翻譯に着手しながら、二割ほど終わったところで逝去してしまった。そこへ思いがけず外國の沙門曇摩流支が「續いで長安に至つた」。律の完備しないのを残念に思っていた廬山の慧遠が書簡で慫慂したこともあり、曇摩流支は羅什と共に關中において十誦律の翻譯を完成させた。つまり『高僧傳』の「達自關中」は『出三藏記集』の「續至長安」を承けているわけで、「關中より達す」とは絶対に讀めないのである。『高僧傳』のフランス語譯(Robert Shih, *Biographies des moines éminents (Kao seng tchouan) de Houei-kiao*, Louvain, 1968)では、この箇所を“il arriva au Kouan-tchong.”(p.82)と正しく譯している。

⁵常盤譯本には「達自關中」を「關より中に達す」と訓み、注釋を加えて「自字不要なり、而[して]又は字の誤りならん」という(p.37)。「關より中に達す」はいかにも無理がある上、注釋に云う所とも符合しない。ここも上と同じく「關中に達す」とすべきところ。佛譯は上の例に同じく正しい：“il arriva au Kouan-tchong.”(p.84)

⁶常盤譯本が「是に於て沙を踰え險を越えて關より中に達し...」と讀むのは、上の卑摩羅叉の場合と全く同じで、誤りである(p.56)。佛譯“Alors ils traversèrent les Sables Mouvants, franchirent les passes dangereuses des montagnes et arrivèrent au Kouan-tchong.”(pp.120-121)は正解。

⁷常盤譯本に「荊州より達して江陵の辛寺に止まる」とあるのも誤りである(p.160)。曇鑿が旅に出たのはおそらく東晉の末か或いは劉宋の初めかと思われるが、當時江陵は荊州の治所であった。それは東晉の太元年間(三七六~三九六)王忱が荊州刺史であった時に、治所を上明から移して以來變わっていない。(『宋書』州郡志三荊州の條を參

(五)釋僧導、京兆人。十歳出家從師受業。…迄受具戒識治愈深、禪律經論、達自心抱。(卷七)(釋僧導は京兆の人である。十歳にして出家し、師匠について佛の教えを學んだ。…具足戒を受けるころには、その識見はいよいよ深くなり、禪律經論どれをとっても、心中深く理解していた。)⁸

さて以上五條の「達自」の例は「～より達す」ではなく、すべて「～に達す」と讀むべきもので、きわめて特異な用法と言わねばならない。「自」は一般には時間あるいは場所について、動作の起點を示すもので、それは述語動詞の前に位置する場合でも、この場合のように動詞の直後に接續する場合でも變わりはない。「自」は普通いわば ablative(從格)なのであって、ここに見られるような allative(向格)の例は他の文獻には皆無である。なぜ『高僧傳』にのみこういう現象が起こっているのかはすこぶる興味ある事柄である。

ところで慧皎以前、魏晉南北朝期には數多くの僧傳が作られている。佛圖澄傳など單一の僧を取り上げたものや、高逸沙門傳、志節傳、遊方沙門傳など類に別って傳記にしたもの、また地域ごとに集めたものなど、その種類には多彩なものがあつた。もちろん佛教東傳以來の歴代の僧を収録する総合的な僧傳も幾つか試みられ、慧皎の直前には寶唱の『名僧傳』が撰述されている⁹。『續高僧傳』の慧皎傳に「唱公撰するところの名僧(すなわち寶唱の名僧傳)の頗る浮沈多きをもつて、因つて遂に例を開き廣を成した」と述べるように、『名僧傳』に對する不滿が『高僧傳』撰述の直接の動機となっているのである。不運にして『名僧傳』は今日すでに傳わらないが、鎌倉時代の僧宗性の抄出した本からその一部を知ることが出来る¹⁰。また僧祐の『出三藏記集』十五卷の末三卷は三十

照。)したがって荊州と江陵は結局同じことで、「荊州から江陵に達する」というのは理屈に合わない。

⁸常盤譯本はここで「禪律經論、心抱に達す」と、この自字をはじめて正しく讀み、かつ注釋を加えて「句中の自字の使用法は、他にも數處見らる。本書の特色なり。」という。また同じ僧傳のやや下に「義眞後爲西虜勃勃赫連所逼、出自關南、中途擾敗。」とある箇所を「義眞後に西虜勃勃赫連が爲に逼られ、關南に出でんとし、中途にして擾敗す」と譯すのも正しい。しかし同所の注釋に「他の場合に對照して、<關南に出づ>とす」と言う割には、他の場合がすべて誤っているのはどうしたものだろう。

⁹『續高僧傳』の寶唱傳に據れば、『名僧傳』は天監九年(五一〇)に發願し、同十三年にほぼかたちを成したらしい。

¹⁰現在、奈良の東大寺圖書館に所藏される『名僧傳指示抄』一卷、『名僧傳要文抄』一卷、さらに『彌勒如來感應抄』全五卷中の第四卷の最初九葉ばかりに引用された部分がそれで、春日禮智「淨土教史料としての名僧傳指示抄名僧傳要文抄竝に彌勒如來感應抄第四所引の名僧傳に就いて」(『宗學研究』十二(1936)pp.53-118)に録文を収める。ち

二人の譯經僧傳であり、『高僧傳』に非常に大きな影響を與えたと見られる。僧祐は『高僧傳』編述當時なお健在で¹¹、南朝佛教界に重きを爲していたから、慧皎がこれを見なかったことありえない。事實、慧皎の自序に「沙門僧祐は『三藏記』を書いたが、三十あまりの僧しかなく、無いものが非常に多い」と評している。自序に列擧するように、慧皎は『高僧傳』の述作に數多くの材料を用いたと思われるが、なかでも『出三藏記集』と『名僧傳』とはとくに重要なものであったと考えてよいであろう。ところでこれら三書に共通して見られる僧傳につき、逐條綿密に比較した結果、慧皎『高僧傳』は『出三藏記集』に依據することが多く、『名僧傳』はほとんど用いていない、という報告がある¹²。ただしこれは三僧傳が存在している場合、すなわち譯經僧傳の一部について見た場合に限られ、それ以外の比較は行われていないから、一概に『名僧傳』を無視したかどうかは斷定できないし、事實『名僧傳』に據ったと思われる部分も少なからず存在する¹³

いずれにせよ『高僧傳』の文章が慧皎の利用したそれ以前の材料をそのままに承けているとすれば、この「自」の特殊用法もあるいはそれらに由來する可能性があることになる。もしそうだとすれば、この特徴も慧皎の言語の特殊性とは言い得ない。それを先ず見ておかねばならない。上に擧げた五條のうち、(三)釋智嚴傳の場合を見てみよう。智嚴の傳は幸いに『出三藏記集』にも見え、そこでは「進到罽賓、遇禪師佛馱跋陀羅、志欲傳法中國、乃竭誠要請。跋陀嘉其懇至、遂共東行。於是踰涉雪山、寒苦嶮絕、飲冰茹木、頻於危殆。綿歷數載。方達關中。」と書いている。兩者を見比べてみれば、慧皎が『出三藏記集』に依據しつつ、やや節略して文を爲したことがよく分かる。また「達自」も慧皎その人の表現であるということが理解されるであろう。同じく注4でも觸れておいたように、(一)の例、曇摩流支傳でも、慧皎は『出三藏記集』が「續至長安」であったものを「達自關中」に書き換えているのである。比較し得る材料は、わずかにこの二條に過ぎないが、これだけでも、おそらく「達自」の用法は慧皎に特殊のものだったと推測してよいであろう。

さてかつて『高僧傳』の語法を考察した森野繁夫氏は、この「自」を取り上げ、それが「しばしば、場所・對象を示す“於”と同じように使わ

なみに『續藏經』所収の「名僧傳抄」は宗性本を忠實に反映していないので、注意を要する。

¹¹僧祐は天監十七年(五一八)七十四歳で建初寺に没した。

¹²里道徳雄「南朝三僧傳の研究(一)」、『東洋學研究』二〇(1985)、pp.61-102.

¹³竺沙雅章「『高僧傳』の資料」、『大乘佛典』(中國・日本篇14高僧傳)月報20、1991年5月。

れる。……しかし、それとともに、本来の“～より”の意味に使われることも多い。……つまり“自”は“～より”という意味でも、また“於”と同じく“～に”という意味にも用いられている」ことを指摘している。そして「～に」の例として上掲「達自」の(一)と(五)および

(六)但生自外域、故吳志不載。(卷一康僧會傳)

(七)[曇]霍從河南來、至自西平。(卷十曇霍傳)

の合計四例を挙げている¹⁴。

とすれば、從格「～より」の「自」と併行して、向格「～に」の「自」が用いられていることになり、兩者の使い分けの構造がどのようになっているかが問われねばならない。また日本語の「～に」には靜態的な locative (處格)と運動を伴った allative (向格)の兩義が存在するわけであるから、その區別も明確にしなければならない。そこで、「達自」以外に、「自」のように、動詞に後置される「自」の例を『高僧傳』から拾い出すと、以下のようなものがある。

(八)以宋元嘉十年、出自流沙至于京邑。(卷三僧伽跋摩傳)

(九)至涼州城、出自陽關西入流沙。(卷三釋智猛傳)

(十)此王莽自言出自舜、皇龍集戊辰改正即眞。(卷五釋道安傳)

(十一)義眞後爲西虜勃勃赫連所遍、出自關南中途擾敗。(卷七釋僧導傳)

(十二)佛調須菩提等數十名僧、皆出自天竺康居。(卷九佛圖澄傳)

(十三)祥瑞冥密、出自心圖。(卷十三釋法悦傳)

(十四)以晉隆安三年、與同學慧景道整慧應慧崑等、發自長安、西渡流沙。(卷三法顯傳)

(十五)以元嘉二十二年閏五月十七日、發自平城。(卷八釋玄暢傳)

(十六)[法]願又善唱導、及依經說法、率自心抱、無事宮商。¹⁵

(十七)迺越自西河、路由巴楚、達于建業。(卷十二釋超辯傳)

(十八)朕生自邊壤、忝當期運、君臨諸夏。(卷九佛圖澄傳)

¹⁴ 森野繁夫「六朝漢語の研究—『高僧傳』について—」、『廣島大學文學部紀要』第38卷(1)、1978、p.250。

¹⁵ 常盤譯は「經によりて說法し、心抱より率ゆ。宮商を事とする無く…」とするが、これも誤りであろう。中嶋隆藏『高僧傳』(講談社、1989)の「まごころのままに任せて音調などは氣にせず」(心抱に率自い、宮商に無事にして)は分かりやすい好譯である(p.307)。ただし訓讀は「心抱に率^{こころ}自^{したが}い」とするほうが好い。(卷十三釋法願)

- (十九) 禮者出乎忠信之薄、律亦起自防非。(卷十一釋僧裕傳)
 (廿) 一館顯自空中。(卷十二釋曇弘傳)¹⁶
 (廿一) 卓焉獨拔、得自天心。(卷四支道林傳)

以上で『高僧傳』中の「動詞+自」の用例のほぼすべてを盡くしているが¹⁷、参考のため「達自」と併行して用いられる「達于」の例も下に挙げておこう¹⁸。

- (廿二) 宋元嘉之中、達于西涼。(卷三浮陀跋摩傳)
 (廿三) 以元嘉八年正月、達于建鄴。¹⁹(卷三求那跋摩傳)
 (廿四) 以八月一日、達于揚州。(卷八釋玄暢)
 (廿五) 俄而度岸、達于京師。(卷十杯度傳)
 (廿六) 路由巴楚、達于建業。(卷十二釋超辯傳)

これら五例の「達于」は「達自」と同じく、向格「～へ」の意味で用いられている。つまり『高僧傳』では、「某所に到達する」の意味に「達自」「達于」の二つの表現があるということになる。そこで、上掲諸例に現れる動詞が「自」か「于」(於)のどちらを取っているかを見るために、表にして見よう(数字は出現回数)。

	自	于	於
達	5	5	0
至	1	21	16
生	2	2	2
出	6	0	0
發	2	0	0
率	1	0	0
起	1	0	2
顯	1	0	1
得	1	0	1

¹⁶ 定盤譯は「一館は空中に顯れ」とし、「<顯自空中>の自字、他の場合の如く、于又は於の如くに見たり」と注する(p.281)。

¹⁷ 明らかに原資料をそのまま引いたと思われる例、たとえば卷六慧遠傳の羅什宛書簡中の文などは除いてある。

¹⁸ 『高僧傳』には「達於」は見えない。

¹⁹ 『出三藏記集』はこの箇所「以元嘉八年正月至都」とする。

「出」「發」などの動詞に「自」が接續した場合、從格「～から」になるのは、動詞そのものの意味から當然であろう。これは「出于(於)」「發于(於)」の例が皆無であるという事實に對應している。また出身地を表わす表現「生自」は「生于」「生於」の例が他に存在することから分かるように、一般的には處格がより相應しいが、意味の上からは從格もあり得ると思われる(参考: ~の出身である)。他の動詞「起」「顯」「得」の場合も、處格、從格ともに可能であり、少なくとも上掲例(十九)(廿一)の「自」は普通の從格として解釋できる。結局、どうしても向格「～へ」として理解しなければならないのは、「達自」「至自」「率自」の三つである。向格であるから、當然ながら「自」よりは「于」(於)のほうが自然なのは言うまでもなく、事實、「至」は「至自」が一例見られるだけで、壓倒的に「至于(於)」が用いられているのである。とすれば慧皎の言語意識の中に從格「～から」と向格「～へ」の區別が無かったということではあるまい。とすれば allative の表示に「達于」と書くべき所を、「達自」と書いたのはいかなる理由に基づくものであろうか。(廿三)の例では、『出三藏記集』を書き改めた際に、慧皎は「達自」を用いず、「達于」を用いていることが注目される。上で見たように、『出三藏記集』を用いて、それに手を入れた場合、慧皎は「達自」を用いていた。まったく同種の状況であるこの例において、「達自」ではなく「達于」を用いたのは、慧皎にとっての「達自」と「達于」が一種の自由變異であったことを窺わせる。それでは、一般的に「自」が從格であることを意識しながら、「達自」と「達于」が自由に交替し得る条件は何であろうか。

その条件は慧皎の言語背景に求める以外に無いと、筆者は考える。はじめに見た如く、慧皎は會稽の人で、人生のほとんどをその地で過ごしている。その母語はいうまでもなく呉語であり、日常は呉語で生活していたに違いない。その日常言語の影がこの現象に投影していると考えすることはあながち不當ではあるまい。

南朝の呉語の実態が如何なるものであったかは、今日ほとんど資料が無く分からないが、今日の呉語における特徴が古い時代から持ち越されたものと考えることが許されるとすれば、「于」(於)は圓唇性のない [i] であった可能性が高い。そして「達」は-tに終わる入聲であり、おおむね [dat] のような音だったと思われる。そうすると

達自 [dat + dzi] [datsi] 達于 [dat + i] [dati]²⁰

²⁰[t] と [i] の結合には [ti] のような口蓋化したかたちを想定する。

のように、「達自」と書いても、「達于」と書いてもほぼ同じ音になってしまうようなことが起こり得たであろう。一種の連聲である。まったく時代がかけ離れていて、證據としてははなはだ根據に缺けるきらいはあるが、呉語が背景となった場合、この種の通用がしばしば見られる例として、明末から清初にかけて江南で廣く行われた通俗書の音注を挙げておこう。『雑字』類の版本は数多いが、音注は基本的にすべて同じである²¹。そこには「雨」を「以」で、「鷄」を「居」で、「猪」を「之」で、「梳」を「思」で、「齒」を「取」で音注するような例が見られるが、これらの通用が「自」と「于」と同じ関係であることはいうまでもない。もちろん頭子音が異なるから、「自」と「于」が常に自由に交替するというわけではない。先行する「達」が舌内入聲(-t)であるということが前提になる。一例のみであるが、「率自」の「率」も同じく舌内入聲であることは、その意味で示唆的である。もし、森野氏のいうように、本来從格である「自」が、そのまま向格-處格にも用いられるというのであれば、理解に大きい混亂が生じるであろう。實際、今日でも向格の意味でありながら「達自」と書かれてあるために、理解に困難をもたらし、また誤讀すら引き起こしていることを考えれば、その不都合は容易に想像がつく。では(十八)「至自」の例はどのように説明されるのかということになるが、これはほぼ同じ意味である「達自」の類推が働いたためと考えるか、あるいは呉方言ではひょっとして「至」字が入聲韻尾を残していた可能性もあるかも知れない。水谷眞成氏の研究によれば²²、永明期(483-493)の四聲説以後、詩文の押韻は中古音系と一致するものがしだいに多くなったが、頑固に「去入同用」を実行する人々もなお多かったという。「去入同用」の見られる作者として名を挙げられているのは、張融(江南人)、江淹(河南江城)、孔稚珪(江南山陰)、陶弘景(江南秣陵)、王儉(山東臨沂)、蕭子良(江南建康)、任勣、謝朓(河南陽夏)、邱遲(江南烏程)、蕭衍(江南蘭陵)、王融(山東臨沂)、王筠(山東臨沂)、沈炯(江南武康)、庾肩吾(南陽新野)、顔之推(山東琅琊但世居金陵)といった面々である。こういった勢力の言語的背景が土着の呉語であったとは、上の貫籍からは即断できないが、もし中古音的な枠組みが中原から持ち込まれた規範

²¹いま手近にあるものとして、康熙八年(1669)千賦堂刊『増補素翁雜字全書』および戊午年(1678)瑯嬛刊『増補幼學須知雜字大全』に據る。

²²水谷眞成「永明期における新體詩の成立と去聲の推移」、もと『吉川博士退休記念論文集』(昭和43年)、いま水谷眞成『中國語史研究—中國語學とインド學との接點』(1994、三省堂、pp.183-202)に収録。

であるとすれば、それに對抗できる具体的な言語として一體何を想像できるであろうか。これは今後一層突き詰めて考察すべき事柄である。いずれにせよ「自」が屬する至韻はそこでは-t入聲とごく普通に押韻しているのである。水谷氏はその解釋として、消滅寸前の摩擦音化した閉鎖子音韻尾を想定するが、場合によってはそれがかなり明らかに感じ取られることもあったかも知れない。

東晉の南遷以後、金陵に都を置いた南朝では、士人の用いる中原の言語と土着の呉語との二重言語使用が行われていたことは明白であり、歴史の記載による考證もつとに爲されている²³。しかしいかに士人の日常用いる言語が中原から持ち越されたそれであり、詩文の規範もまた中原で培われた洗練された様式が墨守されていたとしても、人口の多数を占める呉語の影響をまったく無視し去ることは出来ないと思われる。慧皎は會稽に生まれ育った純然たる呉人であった。その手になる文字に呉語の微かな影がほの見えても不思議ではない。

²³陳寅恪「東晉南朝之吳語」、『金明館叢稿二編』(陳寅恪文集之三) 上海古籍出版社、1980、pp.267-272.